

日本語を母語としない中学・高校生の語彙調査

樋口万喜子

(神奈川県立神奈川総合高等学校)

2005 年 4 月 10 日

1. 目的

日本語指導が必要な外国人児童生徒の数は横ばいであるが⁽¹⁾、学校の在籍期間別に見ると、「2年以上」在籍している児童生徒数は増加しており、外国人の定住化の傾向が強まっていることがわかる。また、ここ数年、小中学生の在籍数には増減があるが、高校生は毎年増え続けており、定時制(4.3%増)・通信制(133.3%増)ともに増加し、多様化している。

日本語初期指導は、文部科学省の施策もあり、各学校の先生方や日本語指導員・ボランティアの指導のもとに一応の成果を収めつつあるが、中学・高校の現場では、日本語中期指導や教科学習についていけない生徒たちへの指導内容や指導方法について暗中模索の状態である。

教科学習と連動した日本語指導であるためには、学習言語能力⁽²⁾を意識した指導であることが重要であるとされ、研究者たちからもその必要性が説かれているが、時間や人材に制限がある学校現場では、その指導は非常に困難な状態である。学習言語能力の実態もよくつかめておらず、語彙ひとつとっても、日本語を母語としない生徒たちが、滞日期間によってどのくらいの語彙を習得しているか、個別的な研究はあるが⁽³⁾、全体としての実態調査などは、まだなされていない。私たち教師も学習言語能力の重要性を概念では理解していても、日々の授業の中でそれらをどう指導していくか、時には、生徒がどの程度、理解しているかさえわからないことがある。

そこで、神奈川県下の高校9校と中学校6校、さらに日本語指導員やボランティアの多くの人々の協力を得て、日本語を母語としない生徒に語彙調査を行い、実態を把握しようと試みた。その語彙調査の結果と生徒の滞日期間や母語、そして家庭内言語や日本語初期指導との関連を分析することが、今回の研究の目的である。

2. 先行研究

Cummins(1991)は、生活言語能力(BICS)を習得するには約1,2年、学習言語能力を同学年の母語話者のレベルに達するためには最低5年必要であり、生活するための言語能力と学習のための言語能力の発達レベルには大きな差があることを指摘した。

小野(1999)は、中国語母語話者の中学・高校生を対象に「日本語・中国語力及び計算力」を調査し、学年相当の学習語彙力を習得するには、約3年必要であると報告した。

また、中島/ロザナ(2001)は、日本の小・中学校のポルトガル語話者に「教科学習に必要なCALP面の会話力」テストを行い、その日本語会話力と滞日年数の間に有意の相関が見られることや、「日本語の会話力が語彙、聴解、読解と有意の関係があり、中でも語彙との相関が高い(.603)ことが分かる」⁽⁴⁾と報告している。

3. 調査方法

3-1 予備調査

2002 年 12 月から 2003 年 3 月にかけて、神奈川県内に在住する非母語話者の中学生 40 名と高校生 69 名に実施した。調査方法は、用例文の中の空欄に四つの選択肢から適切なことばを選び入れる問題で、滞日期間によって問題のレベルを変えた。

結果は、母語が漢字圏か非漢字圏かで正答率に差が生じ、漢字圏の高校生の場合、24-48 ヶ月の滞日期間で 60-100%の正答率に分布したが、非漢字圏の高校生の場合は、25-90%とかなりのばらつきが見られた。また、中学生の正答率と滞日期間の関係にも注目すべき点があり、実施方法等に改善、修正を加え、本調査となった。

3-2 本調査

3-2-1 調査対象

神奈川県内に在住する非母語話者の中学生 56 名(有効回答数 48 名)と高校生 106 名(有効回答数 84⁽⁵⁾)を対象として実施し、滞日月数が 72 ヶ月内を有効回答とした。

高校生に実施した場所は全て学校で、全日制生徒 67 名、定時制生徒 17 名である。中学生の場合は、国際教室、取り出し授業など学校で行ったもの 39 名、ボランティアと地域のセンターで行ったものが 9 名である。

3-2-2 調査時期

2003 年 10 月～11 月

3-2-3 調査方法

- (1) 語彙調査問題は、用例文の中の空欄に四つの選択肢から適切なことばを選び入れる 60 問で、制限時間はもうけず、漢字にはルビを振った。監督者からの注意などで、実質上、「わからない」という解答も可能であるようにした。中学・高校生ともに同じ問題で、3つのレベルの問題 20 問ずつからなる構成である。

レベル 1 の問題の 9 割は、初期指導書「日本語を学ぼう 3」⁽⁶⁾の語彙リストや工藤(1996)が「日本語教育における生活基本語彙選定のための候補」として提案した 2410 語に含まれる語で、日本語能力試験の 4 級に相当する。レベル 2 の問題は、それらには 9 割入っていないが、玉村(2003)が「とくに学習や研修の分野で必要な語」とした「中級用語彙」に 9 割入っている。このレベル 3 のレベルは日本語能力試験の 4 級、3 級、2 級にほぼ相当する⁽⁷⁾。

- (2) 言語環境調査は、日本語による質問紙形式で行った。質問項目は名前(イニシャル)、生年、来日年、通校までの期間、家庭内で使用される言語、ボランティアから支援をうけた(ている)かどうか、日本語教室・国際教室⁽⁸⁾に通った(ている)かどうかなどである⁽⁹⁾。

4 . 分析

4-1 高校生の語彙調査問題

4-1-1 滞日月数と正答率との関係

問題の正答率と滞日月数を次の図 1 に示す。中島/ロザナ(2001)が、ポルトガル語母語話者の小中学生の調査をもとに、「特に日本語の語彙は滞在年数と .621 の相関が見られる」と報告したよう

に、本調査でも、非漢字圏の生徒の滞日月数と正答率との相関係数は.609であった。漢字圏生徒は.324、全体では.456の相関であった。

図1 高校生の正答率と滞日月数の関係

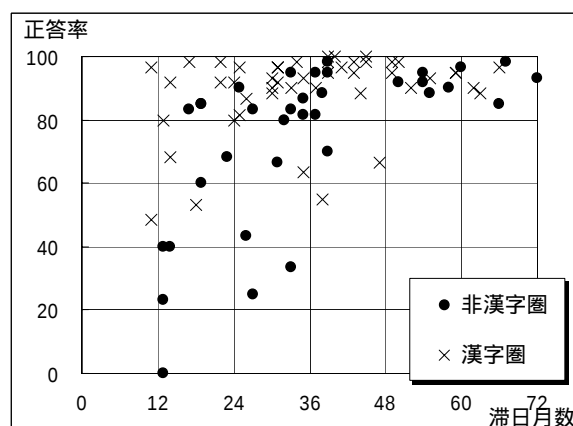


図2 高校生の滞日月数別正答率の変化

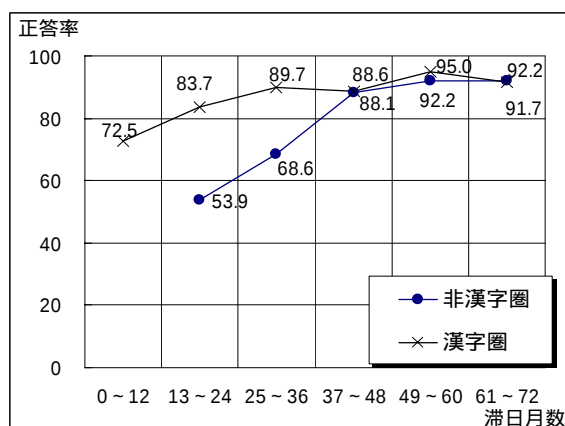


図1にあるように、漢字圏生徒の場合、来日11ヶ月以上で、全員が約50%以上の正答率を示しているが、非漢字圏の高校生の場合は、13ヶ月であっても0%があり、その後も正答率にばらつきが見られる。

しかしながら、図2に示すように、滞日月数別の平均正答率を見てみると、36ヶ月以内では、非漢字圏の生徒は漢字圏生徒と大きな差が見られるが、徐々にその差は縮まり、36ヶ月を過ぎれば、急速にその差は縮まる。

図3 正答率と滞日月数の関係

4-1-2. 言語環境調査より

短い滞日期间で高い正答率をあげたグループと滞日期间の割には正答率が低いグループの特徴を見るため、次の条件で二つのグループを抽出した。滞日月数が20ヶ月以内で、80%以上の正答率であった生徒たちをAグループ、正答率が40%に満たない生徒と平均35.5ヶ月を超えているのに、正答率が70%に満たない生徒を合わせてBグループ⁽¹⁰⁾とする。それぞれの言語環境調査の一部と担当教師からの聞き取りなどで得られた情報を次に示す。

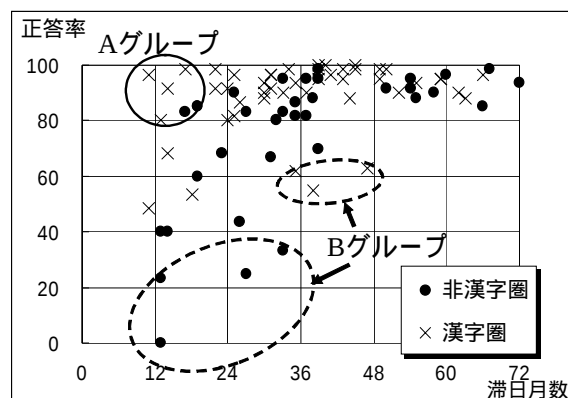


表1 Aグループの言語環境調査の一部

生徒	生年	来日時	来日後、どこで勉強したか	来日後、誰から学んだか	通校まで	滞日月数	母語	家庭言語	正率	困ったと思ったことはあるか
1	1986	02.11	地域のセンター	ボランティア高校の先生	5	11	C	C,J	96	ときどき感じる
2	1984	02.9	取出. 国際教室	ボランティア高校の先生	7	13	C	C	80	いつもある

3	1986	02.8	自習	自分の親	8	14	C	C,J	91	ほとんどない
4	1986	02.5	地域のセンター	ボランティア	4	17	Tg	Tg	83	ときどき感じる
5	1986	02.5	中国帰国者定着促進センター	センターの先生・ボランティア	3	17	C	C	98	ほとんどない
6	1984	02.3	国際救援センター	センターの先生	11	19	V	V	85	ときどき感じる
7	1987	02.3	地域のセンター	ボランティア	12	19	Th	Th,J	85	いつもある

表2 Bグループの言語環境調査の一部

生徒	生年	来日時	来日後、どこで勉強したか	来日後、誰から学んだか	通校まで	滞日月数	母語	家庭言語	正率	困ったと思ったことはあるか
1	1987	02.9			7	13	S	S	0	
2	1984	02.9		ボランティア	7	13	S	S	23	ときどき感じる
3	1985	01.7	地域のセンター	ボランティア	21	27	S	S	25	いつもある
4	1984	01.1	日本語学校	日本語学校の先生	27	33	カ	カ	33	ときどき感じる
5	1987	00.11	自然に覚えた		0	35	C	C,J	63	全然、ない
6	1987	00.8	取出・国際教室	小中の先生	13	38	C	C	55	ときどき感じる
7	1984	99.11	取出・国際教室	小中の先生	1	47	C	C	67	いつもある

(通校まで = 来日してから通校までの月数。家庭言語 = 家庭で使われている言語。正率 = 正答率。取出 = 取り出し授業。言語の略は、C = 中国語、Tg = タガログ語、V = ベトナム語、Th = タイ語、S = スペイン語、カ = カンボジア語、J = 日本語。「困ったと思ったことはありますか」は、「毎日の生活で、日本語がつうじないで困ったと思ったことはありますか」の回答。「ア.いつもある イ.ときどきそう感じる ウ.ほとんどない エ.ぜんぜん、ない」から選択。空欄は未記入。)

(1) Aグループの言語環境調査と聞き取りから

A-1 は、中国の中学を卒業後、2002 年 11 月に来日し、日本語学習歴は無かったが、地元のボランティアグループから日本語を学んでいる。翌 2003 年 4 月に外国籍枠のある高校に進学し、週 6 時間の日本語の授業(国語の振り替え)や、家庭科、理科、保健などの取り出し授業を受けている。部活動や学校行事も積極的に参加し、2003 年 12 月の日本語能力試験 1 級に合格。家庭で使われている言語は、日本語。

A-3, 6, 7 は、来日前に日本語学校に通い、A-5, 6 は、それぞれ中国帰国者定着促進センター、国際救援センターの専門の教師から日本語を学び、異文化適応教育も受けている。

(2) Bグループの言語環境調査と聞き取りから

非漢字圏の B-1, 2, 3, 4 は、レベル の問題(2 級程度)が 0 点である⁽¹¹⁾。基本会話ができるにとどまり、教科学習の理解には至っておらず、中にはひらがなが不完全な生徒もいる。

来日時期と通校開始期まで、間が空いている生徒が多い。B-1, 2, 3, 4 は、定時制の生徒である。外国籍生徒の在籍が全学年で 20 数名の定時制高校では、取り出し経験者が卒業できた例はほとんどなく、2004 年度卒業した生徒 3 名は取り出しが不要の生徒であった⁽¹²⁾。

B-5 は漢字圏の生徒で日本語支援が全くなく、「自然に覚えた」とある。「日本語が通じないで困ったと思ったこと」は「ぜんぜん、ない」と生活言語には不自由がないようだが、35 ヶ月滞在していたが、63%の正答率であった(漢字圏の平均正答率は 89.1%)。レベル の問題は、正答率 15%(3/20 問)であった。

4-2 中学生の語彙調査問題

4-2-1 滞日月数と正答率との関係

中学生全体の平均滞日月数は、29.5 ヶ月、平均正答率は 68.7%であった。高校生と同様、来日してはじめての 36 ヶ月は、漢字圏の生徒の方が高い正答率を示すが、36 ヶ月を過ぎれば、その差はほとんどなくなる。

中学生全体の滞日月数と正答率との相関係数は .569 で、漢字圏生徒は.542 非漢字圏生徒は.640 であった。高校生同様、滞日月数との関係では非漢字圏生徒の方が高い相関係数を示す。

図 4 中学生の正答率と滞日月数の関係

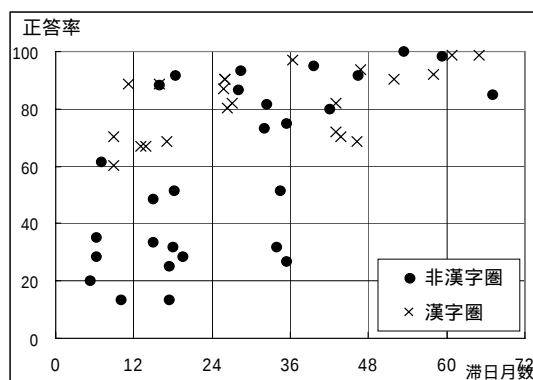


図 5 中学生の滞日月数別正答率の変化

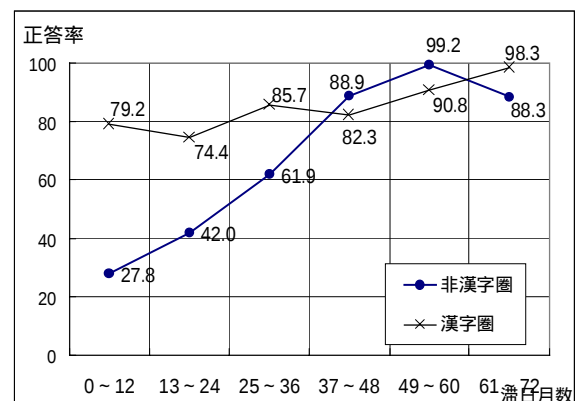


図 6 中学生の正答率と滞日月数の関係

4-2-2 言語環境調査より

滞日月数 20 ヶ月以内で正答率 80.0%を超えた生徒たちを C グループとする。一方、平均滞日月数を過ぎているが、正答率は平均以下を D グループとする。それぞれの言語環境調査の一部を次に示す。

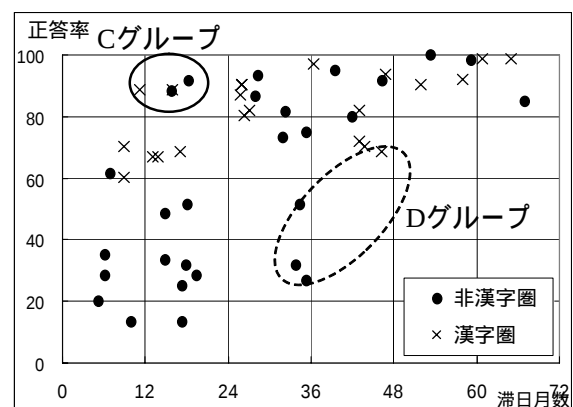


表3 Cグループの言語環境調査の一部

生徒	生年	来日時	来日後、どこで勉強したか	来日後、誰から学んだか	通校まで	滞日月数	母語	家庭言語	正率	困ったと思ったことはあるか
1	1989	02.12	取出・国際教室 日本語教室	小中の先生 日本語指導員	1	11	C	C	88	ときどき感じる
2	1988	02.07	取出・国際教室 日本語教室	小中の先生 日本語指導員	1	16	Tg, E	Tg, E	88	ときどき感じる
3	1987	02.07	取出・国際教室 地域のセンター	日本語指導員 ボランティア	0	16	C	C	88	ときどき感じる
4	1989	02.05	取出・国際教室 他	小中の先生 日本語指導員	0	18	S	S,J	92	全然、ない

表4 Dグループの言語環境調査の一部

生徒	生年	来日時	来日後、どこで勉強したか	来日後、誰から学んだか	通校まで	滞日月数	母語	家庭言語	正率	困ったと思ったことはあるか
1	1988	01.01	取出・国際教室 地域のセンター	小中の先生 日本語指導員 ボランティア・母	0	34	S	S	52	ときどき感じる
2	1988	01.01	取出・国際教室	小中の先生	0	34	S	S	32	全然、ない
3	1990	00.12	取出・国際教室 日本語教室	小中の先生 日本語指導員	0	35	S	S,J	27	ほとんどない
4	1987	00.01	取出・国際教室	小中の先生 自分で	0	46	C	C	68	全然、ない

(表3, 4の見方は表1, 2と同じ。日本語教室 = 他の学校にある日本語教室, 拠点校。母語・言語欄のEは英語)

(1) Cグループの言語環境調査と聞き取りから

C-1は、留学生やボランティアの大学生から日本語指導を受けており、国際教室では、漢字語彙の指導がよく行われていた。

C-4は、母国で日本語補習校に通い、来日したときには小学校3年生までの漢字学習を修了しており、家庭でもなるべく日本語を使うようにしていた。また、来日してからは、家庭ではスペイン語を忘れないために、スペイン語を多く話させていたという母親の談がある。

(2) Dグループの言語環境調査から

生年、来日時、母語が同じであるD-1, D-2の正答率は、レベル , , の順に、(80, 55, 20)と(80, 10, 5)で、レベル の生活基本的語彙の正答率は同じであった。レベル , の正答率の違いは、D-1が、母親(家庭)・日本語指導員(学校)・ボランティア(地域のセンター)から

さまざまな形で、日本語支援を受けていたことと関係が深いと思われる。

D-4は、取り出し授業しか受けておらず、他に日本語支援を受けていない。「自分で勉強した」と回答していて積極的には支援を必要と感じていない。中学生の平均正答率は、68.7% (平均滞日月数は 29.5 ヶ月。漢字圏のみの正答率は、80.4%,)であるが、46 ヶ月の滞日で、68.3%の正答率であった。

4-3 高校生の言語環境調査

神奈川県の「日本語指導が必要な外国人児童生徒」は愛知県について全国2位の数であるが、県全体での生徒自身への学習の実態調査は今まで無かった⁽¹³⁾。母語や来日時、年齢が同じでも、日本語の習得に大きく差が出るのは、個人的な能力の他に、何がその要因となるのか、学習環境として何が 필요한かを調べるための基礎資料を集めるため、「言語環境調査」(生徒用には「日本語のことは調べ」とある)を行った。

初級者でもこたえやすくすること、時間的な制約があることを考慮し、下記の質問紙形式となった。(複数回答可)ここでは、来日後の日本語学習の場所と指導者を尋ねた結果について報告する。

5. 来日してから、どうやって、日本語を勉強しましたか。(いくつ、○をつけてもかまいません)

どこで？

ア. 自分の中学校の取り出し授業や国際教室で

イ. 地域のセンターで

ウ. 日本語教室のある他の小・中学校に行って

エ. その他()

だれから？

ア. 小・中学校の先生から

イ. 日本語学校の先生から

ウ. 日本語指導員から

エ. ボランティアの人から

オ. その他 ()

平均滞日月数には満たないが、正答率が平均以上の 25 名を E グループとし、高校生の有効回答数 84 人と比較したものが、次の図 7・図 8 である。

ここで注目されるのは、学習の場所を地域のセンターと答えた生徒は、調査者全体では 27%であるのに対し、この E グループは 60%であったことである。そして、「だれから」日本語を学んだかと問われると、この E グループの 54%が「ボランティアから学んだ」と全体よりも 10%高い比率でこたえており、このグループにとって、ボランティアの役割が大きかったことがわかる。

また、E グループは全調査者よりも、高い率で専門性の高い日本語教師や日本語指導員をあげたこと、親や友達のように身近な人から日本語を教わったことを記したことも注目してよいであろう。

このアンケートは複数回答で二者択一のものではないので、学校での学習のほかに、さらに校外での学習が加わったと解釈すべきで、その多様性のため数字だけで単純に比較することはできないが、ボランティアとの学習が、このEグループの正答率を高めたことは否定できないであろう。

ボランティアとは、多くの場合、個人的な日本語でのやりとりであるから、自分の疑問点を尋ねるなどインタラクティブな学習が内容の理解を深めるのに役立ったのだと思われる。この会話を通した学習は、読み書き/話す聞くの言語能力全てを活性化するもので、認知力の必要度が高い抽象的な語彙の理解に役立ったものと考えられる。教育心理学の分野でも、コミュニケーションを通した学習の方が、ドリルよりも効果が高く、その学習の深さが記憶に影響を及ぼすとの報告がある。(中條 他(1992))

最後に、60問全体の正答率の高さが、レベルの問題の正答率の高さに結びつくかという問題がある。20問ずつの構成であるから、82%以上の正答率は、レベルの語彙が少なくとも50%以上できないと出せない数字である。さらに図9の中学生と高校生を合計した全調査者132名の滞日月数別問題レベル別正答率が示すように、よりの方がどの段階においても低く、全体の正答率を高めるためには、難易度の高いレベルの正答率が高くなければならない。したがって、60問全体の正答率が高かった生徒は、の問題すなわち抽象度の高い語の正答率が高かったことがわかる。

図7 日本語をどこで学習をしたか？

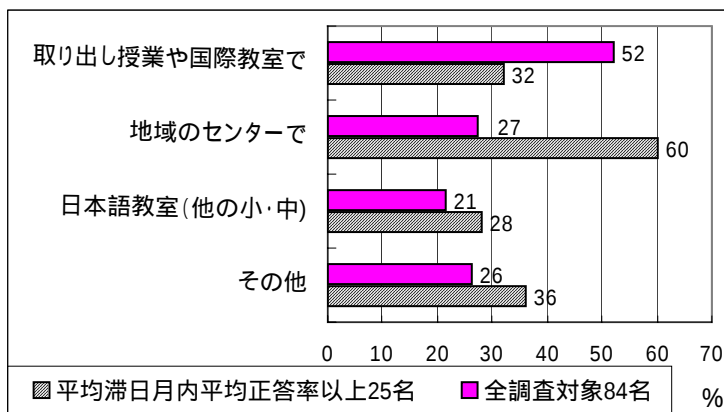


図8 日本語は、だれから教わりましたか？

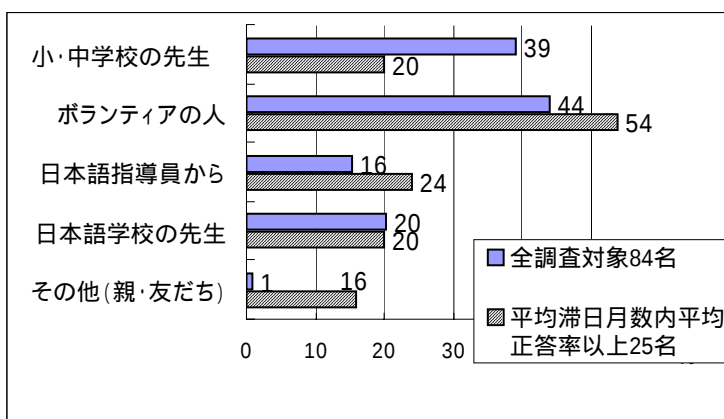
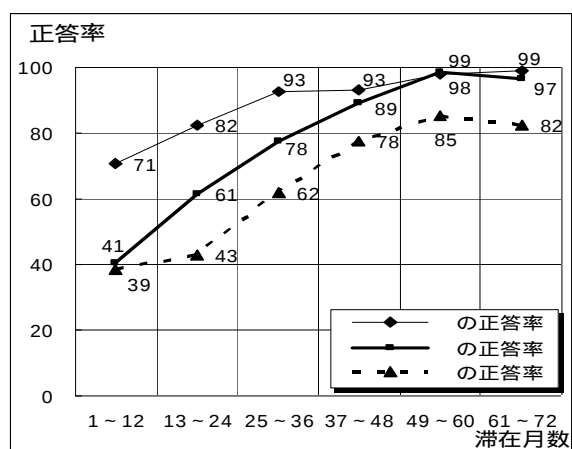


図9 中学・高校生全調査者の滞日月数別の問題レベル別正答率



5.まとめ

以上の分析結果をまとめると、次の4点となる。

中学・高校生ともに、来日して初めの 36 ヶ月以内は、漢字圏の生徒の方が非漢字圏よりも正答率が高いが、徐々にその差は縮まり、36 ヶ月を過ぎれば、ほとんど変わらなくなる。

中学・高校ともに正答率が高かった生徒は、ボランティアから日本語支援を受けていた。このボランティアとの学習は、未知のことをすぐに知りうる状態にあり、会話という自己体験を通して、認知力の必要度が高い抽象的な語彙を理解していける学習環境であった。

短い滞日期間で正答率の高い中学・高校生の多くは(表1・3)は、「日本語が通じないで困った」と日本語の必要性を感じている。一方、滞日期間の割には正答率が低い生徒(表2・4)は、「困ったと思ったこと」は「ぜんぜん、ない」と11人中3人がこたえている。生活言語に不自由しない生徒でも、日本語学習への自覚がなければ、日本語環境の中に長くいても、抽象的な語を理解していくことは難しいことがわかった。

短い滞日期間で正答率の高かった高校生は、日本語を教えてくれた人として専門の日本語教師や日本語指導員をあげている率が高い。私たち教員も、日本語教育の専門性を高めるために、日々、研鑽を積むことが求められている。

注

- (1) 「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成 15 年度)」の結果
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/03/04032401.htm
- (2) Cummins のいう「学習言語能力(Cognitive Academic Language Proficiency)」で、「学力を伸ばすために必要な総合・分析・類推・評価・解釈といった認知処理を支える言語能力」を言う。(『はじめての日本語教育[基本用語事典]』)これに対し「生活場面で必要とされる言語能力」を「生活(または伝達)言語能力(Basic Interpersonal Communicative Skills)」とよぶ。
- (3) 松本恭子 (1999a) (1999b) (2000)の個人の縦断的研究や、中島和子/ロザナ(2001)のポルトガル母語話者の会話力調査の報告、生田裕子(2000)(2001)のブラジル人中学生の作文に表れた語彙の研究など。
- (4) 中島和子/ロザナ(2001), pp.20-21
- (5) 再入国した生徒と、年齢が 20 歳以上、および滞日月数が 72 ヶ月以上を過ぎた者を対象外としたため、有効回答数は、高校生 84 名、中学生 48 名となった。
- (6) 文部科学省が小学生の算数、理科、社会の学習を理解するために必要な日本語を指導する教材として作成。教師用指導書の最後に、中国語など5カ国語の新出語彙対訳リストが掲載されている。
- (7) 問題例 レベル (日本語能力試験 4 級程度): 1~20
日本^{にほん}から、がいこくへは()でいきます。 バス タクシー じどうしゃ ひこうき
レベル (日本語能力試験 3 級程度): 21~40
じしん^{いえ}で 家が()います。 きえて ゆれて にげて まわって
レベル (日本語能力試験 2 級程度): 41~60

10年前の資料を見たかったが、()がぜんぜん残っていなかった。 記念 記録 記憶 保管

- (8) 「日本語指導の必要な生徒が5人以上だと加配教員が配置され国際教室が設けられる。それ以下の場合は、日本語指導員が各学校を訪問したり、生徒自身が拠点校にある日本語教室に通ったりする。
- (9) 添付資料
- (10) 正答率が40%に満たない生徒が全員、非漢字圏生徒であったため、漢字圏生徒で平均滞日月数を超えているが、「正答率が70%に満たない生徒」にも注目し、合わせてBグループとした。なお、漢字圏のみの高校生の平均正答率は、89.1%であった。
- (11) 正答率は、レベル、の順に B-1(0,0,0)、B-2(12,2,0)、B-3(11,4,0)、B-4(13,7,0)であった。
- (12) 卒業した生徒は、日本生まれ、小学生時に来日した生徒、母国の大学で日本語を学習したことのある30代の生徒である。日本の定時制全生徒の卒業率は50数%で、卒業時には入学者の半分近くが退学してしまう。 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/12/011231/011231f.htm
- (13) 指導主事や教員へのアンケート、地域学習室や国際教室への聞き取り、在籍状況や滞日年数の調査については、神奈川県教育文化研究所(宮島喬 他)の詳細な調査がある。私たちの今回の調査は、学習者自身への語彙調査で、県全域を網羅するものではなかったが、横浜市、川崎市、茅ヶ崎市、平塚市、横須賀市、藤沢市、大和市、厚木市、愛川町の中学・高校に在籍する生徒に実施したものである。

*なお、この報告書は2003年12月14日に行われた第14回第二言語習得研究会全国大会で、黒田矢須子(横浜国立大学)、清水幹夫(神奈川県立湘南高校定時制)、後藤邦昭(横浜市立矢向中学校)、齋藤京子(伊勢原市立伊勢原中学校)とともに研究発表したものに、加筆訂正したものである。調査に際し、日本語指導をされている先生方やボランティアの方々、そして生徒の皆さんなど、おおいの方々にご協力をいただいた。ここに、感謝の意を表したい。

参考文献

- (1) Cummins, J. (1991) Language Development and Academic Learning. In L. Malavi & G. Duquette (eds). *Language, Culture and Cognition : A Collection of Studies in first and second Language Acquisition*. Multilingual Matters, pp.161-175
- (2) 生田裕子(2001)「ブラジル人中学生の語彙の発達-作文のタスクを通して-」『日本語教育』110号, pp.120-129
_____(2000)「日系ブラジル人生徒の母語の能力と日本語の能力の相互関係-作文のタスクを通して」『言語と文化』Vol.1, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻編集 http://www.kikokusha-center.or.jp/resource/new-resource_f.htm
- (3) 小野博, 五十島優, 林部 英雄, 池上摩希子(1999)「中国から来日した児童・生徒の日本語・中国語力及び計算力の調査とその応用」『中国帰国者定着促進センター紀要6』
http://www.kikokusha-center.or.jp/resource/ronbun/kiyo/6/k6_13.pdf
- (4) 神奈川県教育文化研究所(2001)『外国人の子どもたちとともに 学習と進路の保障をもとめて』

神奈川県教育文化研究所発行

- (5) 川崎香織(2003)「日本語ボランティアの意義」『立教大学大学院紀要 21 世紀社会デザイン研究』2003 年 2 号, http://www.rikkyo.ne.jp/~z3000268/journalsd/no2/no2_thesis8.pdf
- (6) 工藤真由美(1996)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』横浜国立大学(*1999 年にひつじ書房から改訂発行)
- (7) 白鳥智美・玉井裕子・小澤容子・樋口万喜子(2000)「児童生徒に対する日本語教育のための語彙調査-社会科教科書の語彙」『2000 年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp.136-141
- (8) 高見澤孟(監修)(1997)『はじめての日本語教育[基本用語事典]』アスク
- (9) 玉村文郎(2003)「中級用語彙 -基本 4000 語」『日本語教育』116 号, pp.5 - 28
- (10) 中島和子/ロザナ(2001)「日本語獲得と継承語喪失のダイナミックス -日本の小・中学校のポルトガル語話者の実態を踏まえて-」
<http://www.colorado.edu/ealld/atj/ATJ/seminar2001/nakajima.html>
- (11) 中條和光・岡崎眸・岡崎繁雄(1992)「単語の記憶に及ぼすコミュニケーション活動の効果」『教育心理学研究』第 40 巻, pp.87-94
- (12) 松本恭子(1999a)「ある中国人児童の来日 1 年間の語彙習得-発話資料のケーススタディ:形態素レベルの分析-」『日本語教育』102 号, pp.68-77
_____(1999 b)「ある中国人児童の来日 2 年目の語彙習得-『取り出し授業』での発話と作文の縦断調査(形態素レベルの分析)-」『第二言語としての日本語の習得研究』第 3 号, pp.36-56, 第二言語習得研究会
_____(2000)「ある中国人児童の来日 3 年目の語彙使用実態 -『国際理解クラス』の活動を通して:発話と作文の分析-」『2000 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.117-12,

添付資料 ここではレイアウト等を変更している。なお、漢字にはルビを振った。

「日本語のことば調べ」

日本語を勉強しているみなさん、日本語はことばが、たくさんあってたいへんですね。そこで、私たち研究会は、どんなことばを覚えたら、まわりの人と楽しく話ができるか、どんなことばを覚えたら、教科書がわかりやすくなるか、調べて提供したいと思います。---中略---そのために、みなさんが、日本語をどんなふうに勉強してきたか、次の質問にこたえながら、教えてください。(こたえたくないことには、こたえなくても良いです。)

1. 名前(イニシャルで良い)と、生まれた年を書いてください。_____年生まれ、名前_____

